

# 農林水産図書資料月報

'96/3

農林水産省図書館



(財)農林統計協会 発行

名入メドヴェーヂェフ 著  
佐々木 洋 訳

### ソヴェト農業

1917—1931

—農団化と農土復合の過程—

本書は、ソ連の反体制知識人を双子のロイととも代表してきたジョレス・メドヴェーヂェフによる本格的なソ連農業の通史である。原著は一九一七年に、つまりソ連の崩壊前にロンドンで出版されている。革命前からレーニン、スターリン、フルシチョフ時代を扱った第一部「政治的転換」六章（一九〇〇年から六四年）と、一九六五年以降の「経済的解決」を問題別に整理した第二部六章からなる。また、日本語版出版に当たって書き下ろされた「一九九〇—一九三年のロシア農業改革」が補章として付け加えられている。

たロシアソ連の社会の安定には、大多数の農民の生活とそこから供給される都市住民への食糧の保障が必須の条件であったという認識である。そこからソ連の歴史は遡りかえらる。一九一七年革命の根本は、土地の再配分のために決起した農民の自然発生的反乱、農業革命であり、農村共同体の復権にその本質をみる（一章）。戦時共産主義から新経済政策（ネップ）への転換も共同体農業の復興のための退却であり、個人競争を通じて共同体を分解し農業生産を拡大する新しい形態のストルイビン改革でもあったと主張する。しかし、重工業偏重型の第一次五年計画は農業の生産手段の高度化をもたらさず、「穀物危機」が発生し、反トラーク、キャンペーンに結集する（二章）。それに続く農業集団化は、「農民に対する戦争」であり、「トラークの清算」であった。その結果は、一〇〇万人以上の農民家族の強制撤去と一九三二—三三年の五〇〇万人の饑死であり、これこそネップ期の自生的な社会発展に対する衝突で破壊的な介入であり、その後の農業問題を規定するものであった（三章）。第二次大戦以前の集団化の「成果」も生物学的収獲高を根拠とするベテンであることが説得的に述

べられている（四章）。一九四二—四七年の戦時と戦後はソ連農業にとって最悪の時期であったが、これも政策の失敗が問題を深刻化させた。そして、一九四八年のルイセンコ学説にもとづくスターリンの「自然改造計画」は、自然環境と人間との共存という科学的農業主義の教義に反する行いとして断罪されている（五章）。この間、著者の目は生物学者らしく穀物の播種期の状況を追い、さらに農業生産の動向と食糧供給量が丹念に示され、さながらドキュメントを読むようである。食糧危機の視点が生きている。第六章「フルシチョフの改革」成果と失敗」では、ややトーンが変化し、それはスターリンのテロルを終わらせ、農民の地位を向上させた点にある。税制改革や穀物調達価格の一定の改善、処女地開発への投資は比較的高く評価され、M.T.S.の廃止、食肉供給計画、行政諸組織の激的な再編は「失敗」とされている。第二部ではブレジネフ以降の時期について、ソ連農業の慢性的な諸問題への打開状況が、食糧と工業作物の生産、家畜問題、機械化と化学化、組織と経済、私的農業の分野にわたって述べられ（七—十一章）、最後に問題と展望が整理されている。

ここでも、生物学者としての専門性を駆使した博識ぶりが顕著である。一九七〇年代以降、一トンの石油輸出で二トンの小麦を輸入したことが農業問題に高いつけをもたらした。その構造の崩壊がソ連そのものを崩壊させたという指摘は、「非農団化」（補章）に悩む現在のロシア農業のきびさをあらわにしている。著者は遠い将来の「ストルイビン改革」を見通しているようであるが、現実の非農団化には否定的である。そのため条件づくりがあまりにも未整備であり、創設された個人農も限界地での外来者を主体とするものであるからである。最後に、論争的であり、かつ農業技術用語がもりばらめられた専門書を平易な文体で訳出するところに努められた佐々木洋氏の決断と努力に敬意を表するとともに、多数の読者を獲得することを期待する。（北海道大学農学部助教、坂下 明彦）

【北海道大学図書刊行会・七年六月  
・三七〇頁・六、六九五円】

